

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

問題1. 次の文章は、柳田邦男著『事実を見る眼』の「自戒」です。

筆者が、この文章のタイトルを「自戒」とした意味について、本文の内容をふまえてあなたの考えを500字以内で述べなさい。

問題2. 筆者の体験した「自戒」を、あなたの身近な生活や社会のなかで、どのように活かすことができるでしょうか。500字以内で述べなさい。

犬が育つのははやいもので、春にわが家におずおずとやってきた赤ん坊の柴犬<sup>サフ</sup>三郎が、新年を迎える頃には、9か月の成犬になって、すっかり家族の一員の顔つきになってきた。

日本犬は主人によくなつくといわれるが、わが家の三郎は、とりわけ人なつこくて、時には淋しがりやでさえある。

わが家の犬の規則では、三郎が入れるのは、勝手口の土間と家事室の床までとなっているのだが、どうも三郎は、家事室とドア一つで仕切られた台所まで入ってきたらしい。誰かがそのドアを閉めて、台所で何かをゴソゴソとやり出すと、三郎は、ドア越しに、キュンキュンと甘ったれた声で、自分の存在を示すメッセージを送ってくる。それを無視して放っておくと、発声がウワッウワッと変る。このウワッウワッは、まだ声を抑えているのだが、それでも放っておかれると、今度はウワーワッと、やや悲痛な訴えと咆え声とをミックスしたような叫びになってくる。

とうとう根負けしてドアを開けてやると、三郎は、さも満足した表情を見せて、床に伏せの姿勢になって、家人が家事をするのを見物し始める。そして、はっと気がつくと、いつの間にか伏せの位置が、半身位、台所の中へ侵入している。うっかりすると、のこのこと尻尾を振って、入ってきたりする。

もちろん即座に退去命令である。三郎はとことこと家事室に戻って、また伏せかおすわりの姿勢になる。

「どうして自分だけがドアのこちら側にこられないのか、三郎は不思議に思っているでしょうね」

妻はよくそういう。

そうだろうなあ、私も思う。しかし、規則は規則、台所はやはりオフ・リミットである。ただ、なるべくドアを開けて、三郎の気持ちを汲んでやらなければならないと思っている。

それでも私などは、小型犬の三郎よりははるかに高い目の位置から、三郎を見下ろして話しかける程度なのだが、中1の息子は、犬の世界って、どんな風に見えるんだろうと、床に寝ころがって、三郎と一緒に転げまわったりする。いつだったか、息子は、犬小屋に、四ツん這いになって、首を突っこみ、「ワン」といって、「なるほど、こんな気持か」と、ひとりで納得していた。

目の位置を犬と同じところに持って行くという、この息子の発想に、私は、子供って面白いことを考えつくものだ、と、感心させられた。そして、背の低い日本人と背の高い欧米人が接するとき、案外目線の角度というものは、ものの考え方や評価の、無意識の要素になっているかも知れない、と思ったものである。

先頃、ニューヨークへ出かけるとき、たまたま飛行機のエコノミー・クラスの最前列に坐ることになった。カーテン1枚で、すぐ前は、ファースト・クラスの部屋である。

機種は、DC10 だった。

エコノミーでもファースト・クラスでも、乗っている人々の顔つきに、とくに違いがあるわけでもないし、空席が割に多くてゆったりしていたから、カーテンの向こうとこちらという意識は、はじめのうちはなかった。

いよいよ離陸、成田空港が眼下に遠去かって行く。離陸時には、緊急事態にそなえて、通路やギャレーのカーテンは、すべて開けられている。

やがて、禁煙のサインが消え、シート・ベルトのサインも消える。巡航高度で安定飛行に入ると、昼食前の飲み物のサービスが始まる。

スチュワーデスが忙しそうに立ちまわる。ビールやウィスキーを積んだワゴンが巡回してくるのを待って、何を注文しようかと、いよいよ旅行気分になってくる。《ファースト・クラスは、オードブルと食事のメニューが、抜群だからいいな》

そんなことも思ったりする。ファースト・クラスに乗ったことがあるので、ウェーターがカクテルや盛り沢山のオードブルで、下にもおかないもてなしをしてくれるのを知っている。

そのときである。

ツカツカとやってきたスチュワーデスが、私の目の前にあるカーテンを、サッと閉めてしまったのだ。そればかりでない。仕切り壁の一角の、ちょうど坐った目線の位置のところにある、のぞき窓のような空間（多分映画上映のとき、ファースト・クラスの部屋に下りるスクリーンを見やすくするためのものだろう）まで、小さな引き戸のようなボードを引き出して、ふさぎ、おまけに、カーテンの端をフックでパチッと壁側に留めて、一分の隙間もないようにしてしまったのである。すべては、私の目の前50センチ位のところで起こった。もうファースト・クラスとの間には、画然たる仕切りが設けられ、ウェーターのサービスなど、チラとも見るこ

ができない。

ああ、こういうことなのかと、私はハッと思い当たった。私がいつも家で三郎にやっていたことは、こういうことだったのかと、仕切られる側の気持ちを、いやというほど味わわされたのだった。それは、ものを書くときの目線の位置には十分気を配らなければならないという自戒につながるものだった。

柳田邦男『事実を見る眼』（新潮社，1985）320～323 頁より抜粋，一部改変。